Japan Geoscience Union Meeting 2012
(May 20-25 2012 at Makuhari, Chiba, Japan)
©2012. Japan Geoscience Union. All Rights Reserved.

HSC24-12 会場:102B 時間:5 月 23 日 12:00-12:15

北海道胆振・日高地方の津波に関するアイヌ口碑伝説の検証
Study on the legends of ancient and historical tsunamis hanbed by Ainu Race

都司 嘉宣 [1*], 今井健太郎 [2], 堀江岳人 [3], 野々山浩介 [3], 岩渕洋子 [4], 今村文彦 [2]
TSUJI, Yoshinobu[1*], IMAI, Kentaro[2], HORIE, Takehito[3], NONOYAMA, Kosuke[3], IWABUCHI, Yoko[4], IMAMURA, Fumihiko[2]

[1] 東京大学地震研究所, [2] 東北大学, [3] アルファ水工, [4] 原子力安全基盤機構
[1]ERI, Univ. Tokyo, [2]Tohoku Univ., [3]Alfa Hydraulic Engeering co., [4]JNES

北海道に住むアイヌの伝承の中に、多数の津波伝承があることが知られている。高清水（2005）は、このような数多くのアイヌの伝説中に現れる津波伝承の内容を紹介している。また、扇谷（1988）のアイヌ地名・民俗の研究者の成果から津波伝承の記載を見いだすことができる。いっぽう、平川ら（2003、2005）や七山ら（2001、2002、2003）による北海道の太平洋海岸の津波堆積物の精力的な調査によって、過去に非常に大きな津波が北海道の太平洋海岸を襲っていたことが明らかとなった。当然、アイヌの伝承のなかには実際に体験された津波の事実が反映されていると考えるのが合理的である。

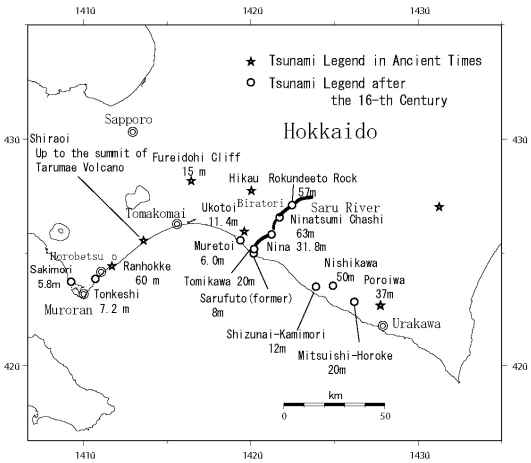
胆振・日高地方には、図に示したような 16 個所で津波伝承が伝わっている。これらの伝承は、内容から考えておおむね１６世紀以後に現実に体験された津波の伝承（図では○で示す）と、聖書のノアの箱船伝承のような「遙か古代の津波」を語っているもの（★で示す）の２種類に分類することができる。

本研究では、これらの伝承の真偽にはあえて立ち入らず、伝承の語る通りに、津波による海水到達点を現地検証し、標高を測定してアイヌに伝えられた津波について考察した。

室蘭市の崎守（さきもり）は、明治期の地図には「元室蘭」と書かれた。吉田（1915）によると、胆振元室蘭の宝器什物類は礼文華エコリの岬に漂い着いた、と伝える。ここの標高 3.8 mに地上冠水２mとして 5.8 mとする。おそらく、1640 年の北海道駒ヶ岳の噴火に伴う津波伝承であろう。

登別市富岸（とんけし）では、酒宴を行っていた６人のアイヌの酋長が、集落もろとも津波に流されたと伝える。

鵡川の河口東岸にあった小丘には、キツネに導かれて丘の上に上がったところ、津波が来たとき助かったと伝える。沙流川の流域は、伝承が豊富である。「昔松前侯の使者が日高沙流太に来たとき、平取以南の首長が集まった。そのとき津波があり沿岸の多くのアイヌと共に溺死した。このとき荷負村のペナコリの下のニナツミのチャシ（砦）にいた老人でさえ溺死した。海水が引いたときカレイ（鰈、ニナ）が残ったのでそこをニナという。」と伝えている。蠣崎氏が徳川家康から松前姓を賜ったのが 1599 年であるから、この一連の伝承は、これ以後の津波である。おそらく、慶長１６年 (1611) の三陸沖地震津波の北海道側の被災を物語るのであろう。ニナツミチャシの位置は沙流川歴史館（2011）によって調査報告されている、それによるとその標高は６ 1m であった。

アイヌ伝承による津波浸水高さを図に記しておいた。

キーワード: 北海道の津波, アイヌ伝承, 歴史津波, 胆振地方, 日高地方
Keywords: tsunamis in Hokkaido, legend of Ainu, historical tsunamis, Iburi province, Hidaka province